

空蟬之命乎情美浪爾所濕伊良虞能鳥之玉藻苺食

〔冠辭考字〕うつせみの

万葉卷一に、空蟬之命乎情美卷三に虚蟬之代者無常跡云々、こは顯しき身の命顯の身の世とつゞけたる也。○中後人は空蟬の字に泥て、蟬脱の事とのみおもへり、其本を極むれば、いき死の違になん侍りける、

〔源氏物語空蟬〕まばしうちやすみ給へど、ねられたまはず、御すゞりいそぎめして、さしはへたる御ふみにはあらで、たゞてならひのやうにかきすすみ給ふ、

うつ蟬の身をかへてげるこのもとなを人がらのなつかしき哉、とかき給へるを、ふところひきいれてもたり。○中いとあさはかにもあらぬ御氣色を、有しながらのわが身ならばと、とりかへすものならねど、忍びがたければ、この御た、うがみのかたつかたに、

うつせみのはにをく露のこがくれてまのびまのびにぬる、袖かな

〔後撰和歌集戀十一〕物いひける女に、せみのもぬけをつ、みてつかはすとて、

源重光朝臣

是をみよ人もすすさめぬ戀すとて音をなく虫のなれるすがたを

〔後撰和歌集戀十二〕つらくなりにけるおとこのもとに、いまはとてさうぞくなど、返しつかはすとて、

平ながきがむすめ

いまはとてこずるにかゝる空蟬のからをみんとはおもはざりしを

返し

源巨城

わすらるゝ身をうつせみのから衣かへすはつらき心なりけり

〔前大納言公任卿集〕たや寺の君のむすめどものもとに、しろきかみに、せみをつ、みて、はちすの